

象嵌

かたど は
象る / 嵌める

令和3年9月18日(土)～令和4年3月13日(日)

兵庫県立考古博物館 加西分館
古代鏡展示館
Hyogo Prefectural Museum of Ancient Bronze Mirrors



緑松石象嵌鋸歯縁鏡 径21.8cm



白玉象嵌獣紋鏡 径9.3cm



金銀ガラス象嵌雲気紋鏡 径13.2cm



孔雀石象嵌透彫鏡 径10.7cm

彫金技法は、金属の表面に鑿で紋様や文字を彫刻したり、切削によって造形して装飾効果高めたりする多様な技法である。そして、意匠する図案の溝や凹みを本体の地金に彫り、金、銀、銅などの金属や多彩な貴石を嵌めこんで意匠をあしらい、色彩を強調する加工技法を「象嵌」と呼ぶ。

中国では、商代(約3,700年前)以降、壮麗な彝器(祖先を祀る青銅容器)が盛行する。これに先だち、青銅器の生産が始まる二里头文化(約4,000年前)の前後には、緑松石(トルコ石)をモザイク状に象嵌した飾り板や武器が登場した。その後、春秋時代(約2,800年前)には青銅器に金銀銅の金属の線や断片を嵌め込む精巧な象嵌が施され、戦国時代(約2,500年前)にはさらに細緻で秀麗な作品が創出された。



金銀緑松石象嵌雲気紋琵琶形帯鈎 長21.0cm



金銀象嵌龍鳳紋杖頭・獣紋鈎 長10.0・17.4cm【千石氏蔵】



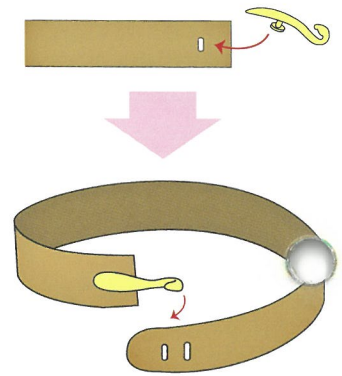
銀象嵌龍鳳紋樽(温酒器) 高16.6 径25.4cm【千石氏蔵】

■帯鉤【たいこう】〔belt hook〕

帯鉤とは、紀元前6世紀から後4世紀頃にかけて用いられた、革帯を留めるためのバックル(フック)である。

形態は変化に富み、湾曲した棒状のものや板状のものもあれば、楽器の琵琶に似たもの、獣や鳥の形に仕立てたものもある。大きさは20cmを超えるものから、5cm余りのものまでさまざまである。裏側にボタン状の突起があり、一端が上を向いた鉤となっている。帯の端の孔にボタン状突起をさして帯鉤を固定し、腰を一周した帯の先の孔に鉤をかけて留める。

材質は青銅製のほか、金や銀、鉄などで作ったものもあり、骨や玉製のものもある。また、金、銀、玉、緑松石(トルコ石)、ガラスなどを象嵌したり、鍍金や鍍銀を施したりするなど、意匠と技巧を凝らした華麗なものもある。



(左) 鉄製金銀象嵌絡龍鳳紋琵琶形帯鉤 長22.7cm
(右) 鉄製金銀象嵌菱円紋匙形帯鉤 長7.8cm

帯鉤の使い方



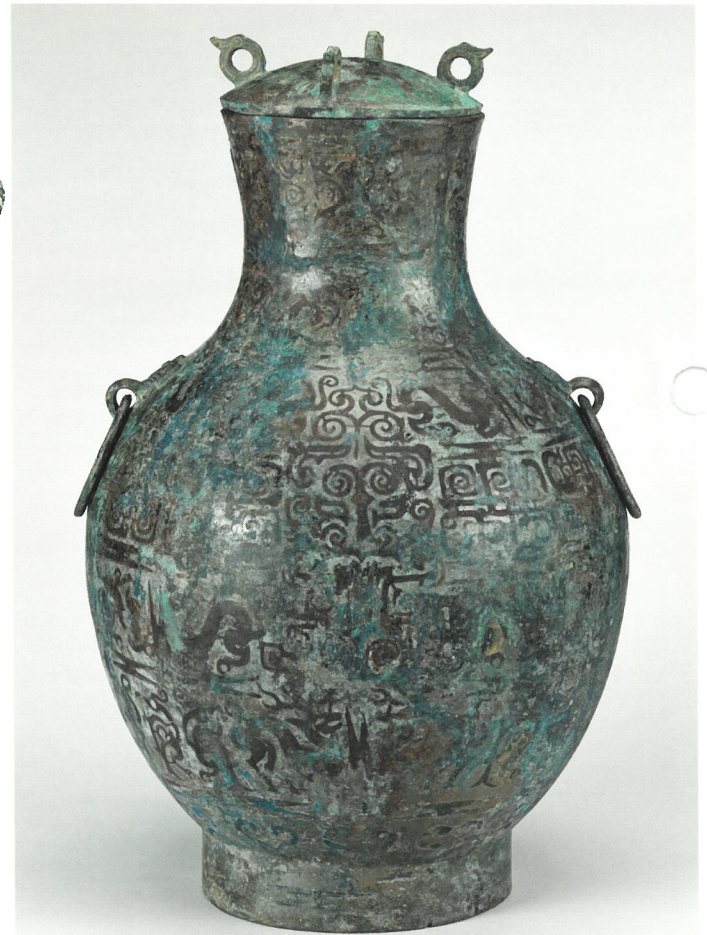
金銀緑松石象嵌獣紋棒形帯鉤
長21.5cm【千石氏蔵】



金銀象嵌鳥形帯鉤 長4.2cm【千石氏蔵】



金象嵌鳥獸紋弩機(弓の発射装置)
高17.4cm【千石氏蔵】



銅緑松石象嵌鳥獸紋壺(盛酒器) 高48.5cm 径30.3cm